

第61回 日本精神保健福祉士協会全国大会 参加レポート

大会名：つながろう“ソーシャルワーク魂の継承” つながろう“新たな実践の創造”

日 時：令和8年9月25日（金）、26日（土）

会 場：石川県（金沢歌劇座、石川県社会福祉会館）

1 概要

2日間にわたり開催された本大会において、企画、講演、ポスターセッション、分科会、すべて合わせると、100を超える演題が集まった。私は9月26日（土）のみ参加した。同日だけでも1000人を超える参加者数であった。

2 参加動機

私自身の転職やコロナ禍が重なり、全国大会への参加は、久しぶりのことであった。全国大会は、各地で活躍する精神保健福祉士の仲間たちが集まる貴重な機会であり、この熱量を肌で感じることができる数少ない機会であると思料する。仕事の都合等で、参加できないこともあるが、今回は石川県開催ということで、行動範囲の中で行ける距離であったため、参加を決めた。

3 内容

午前に開催された分科会Ⅰにおいては、「メンタルヘルス支援」と「当事者性を活かす／家族支援」に参加した。午後に開催された分科会Ⅱにおいては、「災害支援／司法・更生支援」に参加した。

（1）分科会Ⅰ「メンタルヘルス支援」

7つの演題の中から、前半3つを聴講した。その中で、特に印象的だったのは、エンパワメントに関する演題であった。歴史的な人権侵害の問題を繰り返さないために、私たち精神保健福祉士にできることはなんだろうか、という視点から、演者自身の変化を実践報告とした内容であった。印象に残った点としては、ケア会議等の場に、本人がいない中で進行する違和感はないだろうか、所属機関の中で当たり前のような通例で行っている支援は、無意識のうちに人権侵害になっていないだろうか、といったことを、日頃の業務において、自身に問うことができているだろうか、と今一度意識する機会となった。

また、自殺未遂者支援の実態に関する演題も興味深いものであった。救急の現場において、自殺未遂者や精神科への繋ぎ等の統計データを取り、分析した結果から紐解いていく内容であった。非常に細かく統計をとられていたことに感銘を受けた。人と制度と生活を繋ぐことができる精神保健福祉士の強みといえる部分を、各機関で発揮していくことで、自殺未遂者への支援を有効な形にしていけることができると感じた。

(2) 分科会Ⅰ「当事者性を活かす／家族支援」

7つの演題から後半の4つを聴講した。特に印象的であったのは、ゲーム・ネット依存者家族に関する演題である。時代の移り変わりと共に、顕在化してきたといえるであろうテーマを取り上げたことが、非常に興味深かった。子供の変化・回復より家族の変化・回復が先であるということには、考えさせられた。本人の問題行動に焦点がいきがちであるが、家族の疲弊感は、本人に敏感に伝わる。本人との接し方も大切であるが、家族の役割にも焦点を当てた研究報告であった。

(3) 分科会Ⅱ「災害支援／司法・更生支援」

6つ演題を通して聴講した。D P A T先遣隊における活動や急性期病棟における身寄りなき認知症高齢者への関わり等を、能登半島地震の支援活動事例を通して報告された。本人らしい生活を共に考えること、意思決定を支えること、なにより問い続けることの大切さ、を語られていたことが印象的であった。日頃の業務でも大切にしていることが、未曾有の災害が起きた中でも、変わらずに大切であると感じた。

また、更生支援計画についての演題もあった。更生支援計画の認知度が低いことに触れられていたが、まだまだ様々な課題があると感じた。

4 総括

リモート開催の研修が増えている昨今、参加しやすく、便利である一方で、対面で挨拶できる機会が減少しているように感じている。研修での出会いから、日頃の業務に繋がることも少なくないため、ぜひ栃木県協会の皆さんにも、足が伸ばせる距離での開催地であれば、ぜひ参加していただけたら、同じ協会員として幸いに感じる。